広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イオン・ドラグミス「サモトラキ」 第三、四章
Author(s)	福田, 耕佑
Citation	プロピレア , 24 : 111 - 123
Issue Date	2018-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046851
Right	Copyright (c) 2018 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

翻訳

イオン・ドラグミス[一]「サモトラキ[二]」

福田　耕佑　訳
京都大学文学研究科博士課程後期
日本学術振興会特別研究員

第三章：ホラ[三]

目が覚めるとともに朝が訪れ、私は消えゆく霧の中に大きな山の姿を眺めた[四]。夕べから北風が吹き、多くの帆が備え付けてある船が、風の立つ海の波にもまれて上ったり下がったりしながら、時に大きな波を引き裂き、時に波の天辺を静かに打ち砕く。私はある時は瞳を閉じて、またある時は船べりの上でいつになれば海際がはっきりと見えてくるのかを確かめるために、島の方を見張りながら横になっていた。夜が明けて霧が晴れ、錨を下ろす場所を見つけるまで、帆船は何度も間切りしていた。時が過ぎ、夜が明けて、私達はさらに島に近づき、海際の木々とまばらな背の高い家が見えて来た。帆を降ろし、錨を投げた。海岸にだぶだぶのズボンを穿いた島民が一人立っていた。船乗りは二人で船尾に結び付けられていた小舟を出した。私は眩暈を感じながらも立ち上がり、その中に飛び込んだ。船乗り達は艪を取って、私達は船に揺られながら陸へと進んだ。海岸から二十尋程で艪を起こして、あの鉄を投げ入れて船を止めた。待機していた島民に太索を放り投げた。まず初めにロープを握って、前に進んで海際の木の一本にそれを結び付けた。その場所では、狭く並べられた小石の帯が、あの山にまで広がっている雑木林と海を隔てている。船が結び付けられるとすぐに、船乗りの一人は脇の下まで浸かるほど海に入り、私を肩に担いでなんとか海の中を歩きながら、陸地まで出してくれた。

私は砂利と小石の敷き詰められた、緑に囲まれた海岸にいた。突然低木の中から、猿かカンガルーのような、スカートを穿いた裸足の若者が飛び出してきた。私が座っていた木の下に来て、私のすぐ傍に腰かけ何かつぶやいている。私はこの島民に、彼が何者で、なぜ女装して私に物語を聞かせるのか尋ねた。彼は白痴であり、夏に

テルマ[五]でエニティスとかいう船長の娘のピネロピに出会い恋に落ちた。そしてその時から、心寂(うらさび)しい海際に小さな帆船が錨を降ろすたびに、ピネロピを忍耐強く待ちながら海岸に降りていく。しかし彼女はまだ来ない。この白痴は、スカートを穿いていつも彼女を待っている。彼の話が私の心を動かすことはなかった。

この島民は私にテルマに向かう道を示した。彼が前に、私がその後ろを進みながら、私達は生い茂る低木をかき分けていった。深々と生い茂るツツジ、ミルテ、コリヤナギ、キョウチクトウ、棘、緑の連なり、ブドウの蔓、野ブドウ、プラタナスの中を歩き回った。キョウチクトウとコリヤナギには花が咲き、辺りによい香りを漂わせていた。その根の中には水が流れていて、それぞればらばらに海へと注ぎ込む。夜明けの涼しさとよい香りが、夏の太陽が飲み干す、朝の捧げ物のように植物から立ち上る。私はそう感じ強く心をかき乱され、その朝、私の心はただ大時化であった。

テルマはここから遠くなかった。私はそこで背が高く太いプラタナスを見た。この木は、八月の温かい海で身を浴すため、知らない土地から来た人達が少数で暮らしている小屋に陰を作っている。私はそこで温かい水も冷たい水も流れているのを目にした。非の打ちどころのない程美しい、緑に囲まれた絶景だった。それなのになぜ私はこうも無感動なのだろうか。

それほど望んでいたわけではないが、ホラに向かうため、彼は私に馬を、そして私は彼が望むものを二つ与えることに同意した。私が彼に同意している間、彼の黒くて手入れのされていない髭を見ていた。彼が馬に鞍をつけるまでに、私は冷水に頭を突っ込んででもなんとか頭を醒まそうとしたが、できなかった。こうして私は馬を駆って道を急いだ。島民は裸足のままで私を追いかけた。私達は再び海岸の方に下り、パリアポリまで海岸の一本道を進んだ。

荷物運びの島民が、その時私に何を言ったのかよくはわからないのだが、私の右手に見える海は濃紺で、トラキアとマケドニアにまで通じていた。そして私は――自分自身それを喜ぶことを期待していたのだが、サモトラキという名のギリシアの島での闊歩を一生懸命謳歌しようとしていた。その名前が私の耳に、黄金のような、高貴なものとして何度も響き渡り、そして初めて聖アトス山から見たあの時から、私はその島の姿が好きだった。陸からも海からも、あらゆる場所から、外側からも、私

はその島を見て、もっと近くから島を識りたいと熱望していた。島の姿と名前が、島の歴史を知らなくても、私を魅了した。こんな風にサモトラキは過去の人々をも魅了していたのだろう。場所というものはその姿が、その姿こそが「その像と肖によって[六]」自身の歴史を創造するのだろう。

私の目の前の遥か向こうに、すぐに海へ真っ逆さまに落ちそうな岬を見ていた。そしてその天辺に、塔が一つ建っていた。パリアポリだった。この時まで私はその名前しか聞いたことのなかったカベイロス達が、はっきりと私の耳に神秘を告げていた。かつて外国で勝利の女神の有翼の身体を見たことがあったのだが[七]、今になって思い出していた。私の幻想は、翼を作り出すために他に何を望んでいたのだろうか。だが、あの朝は気分が重苦しく、まだ活力が追いついていなかった。私は、口の利く気も起らない、憂鬱な無感動に取りつかれたままで、鉛のように重かった。私の中で、深い所から出た声が話しているようだった。

岩だらけの乾ききった山の左手には、花の咲いたコリヤナギとキョウチクトウ、そしてプラタナス共に激流が迸り、大水が海へ注いでいる。

今思い返してみれば私は、島民が高すぎる税金に不平を言っていたのを思い出し、暴君達の立ち去る時もいつかは来るが、その日が到来するには、私達が皆、その日が通るための道を切り開くため、力をつけ、死力を尽くし、きっと戦わねばならないのだということを彼に説明してやった。私達が、その日をもたらさねばならず、その日が一人でにやってくるのではない。きっと私の言葉を待っていたので、髭とだぶだぶズボンの島民は何も言わなかったのだろうが、私は何らかの慰めが彼の胸に注ぎ込み、そして希望をもって税金の重さが少しでも軽く感じられるようになるであろうことを知っている。今私にはただ言いようの知れぬ悲しみが残っていた。というのも私は、あの島民が決して念願のあの日が一時間でも早く来るために、何もしはしないことを知っていたからだ。確固とした高貴な希望が労働者の魂の中で芽を出した一方で、漠然とした希望という女奴隷が運命からの救済を希求している。この労働者は自分で手にしている何か、そして自分自身の希望のために尽力している。他方は奴隷であるが、彼の希望にも何か言いたいことがあるはずなのだ。というのも、もし希望がないのであれば、そのことは、もはや彼が自分を奴隷であるとは感じてい

ないということ、そして自分が動物になってしまったか或いは自分の暴君と一つになってしまった、ということを意味しているからである。

話しながら歩いているうちに、私達はパリアポリに到着した。私は、長い時間遠くから眺めていた塔の立つ岬に登った。まばらな岩と規則的な礎石で積まれた古い壁と石綿で作られた壁を、そしてオリーヴの木々とヒイラギ、その他の低木の中に、壊れた古い建物と大理石で彫られたサソリも見た。パリアポリとその歴史を感じるために、私はまず今日のサモトラキ人に会わねばならない。そして今を生きている人々のいるホラへと急いで降りて行った。

丘の根元には、――大水が流れているのだから――大きなプラタナスが植わっており、私はその空っぽの幹の中でコーヒーを淹れているサモトラキ人を一人見つけた。この穴は煙で真っ黒になっていて、小さな光が一つだけ木々の陰によって作られたその暗闇の中で輝いている。そしてその輝きの中で、こんな心寂(うらさび)しい地で会うとは思ってもいなかったサモトラキ人が私にはカベイロスのように見えた。

今私達は海際を出発し、木々の中を昇っていく山の斜面に沿って小道を進んだ。日が高く上り、木々の間隔も広くなってきた。大きな木の周りに羊達が休んでいて、ずっと下の方で羊飼いと狗が寝そべっている。真夏の日差しは煮え立つように強く、灼熱の石々が様々な蒸気を立ち上らせている。私の頭は醒めていたが、からからに乾いた暑さで酩酊したかのようになっていた。濃碧の峡谷が見え始めたが、私は底まで降りて行きはしなかった。少し開けたところに、山々の中に埋もれ守られている村を見た。そこの家々は、一つ一つが重なって乾いた山の背に登るように建ち、山の石の色をしていて、屋根の替わりにテラスがあり、窓はほとんどなかった。

ホラは海から遠く、極度に怖がりの人達によって建てられたような、孤立し隠され、過保護に守られた高地にある、今を生きているサモトラキ人達の街である。この街を上りながら見上げていた場所から、その頂上でジェノヴァ人達の要塞を支えている切り立った岩が、この街を半ば覆い隠している。

私が馬から降りたあの狭い石垣が村の中心部だったのだろう。私は、一度もまだ目にしたことのない新しい場所にいたのだが、そこの人々は私にとって見知らぬ人々ではなく、以前から知っているような、なじみのある場

所だった。小さな喫茶店、店の外にはたくさんの椅子、店の中には小さな木製の机の傍においてある小さなベンチ、一、二本の斜めに曲がった木。向こうの方には、乾物屋や八百屋においてあるような物をごちゃごちゃと少し並べられた乾物屋。頭にスカーフを巻いただぶだぶズボンの島民、気怠げな足取りで通り過ぎていく人々。外の椅子や中の机についている人はほとんどいないのだが、この見知らぬ男を横目で見ている。そして小さなズボンを穿いた島の子供達が無言で集まって来て、崇めるような思いを称えてこの見知らぬ男を観察している。蠅は机の上にへばりついているが、そこが不潔な場所だからだ。皆動き回っている。ただこの正午という時間だけが私を魅了し、私は椅子に座っている。他の近くにあった椅子に髭の男が静かに近づいてきて腰をおろし、私がどこから来て、どんな仕事をしていて、何をしたくて、またどこに行ったのかを鷹揚に尋ねた。この死んだ村と死んだ正午の中でも、彼はどこか生気に満ち溢れているかのようであり、他の人達の中で目立っていた。後になって、彼が船主でスパイの、トルコ人アーリーだと知った。

夕方、私は何人かの島民達、司祭、教師と一緒にヴィグラの屋外にいた。私はこれまで一度も見たことのなかったリムノス島[八]を見てみたかったのだが、その小高い場所から多くの場所を見ることができた。私達の眼前には、なだらかな丘の斜面が下っていて、他の場所に森が、また別の場所には乾いた畑が見えた。そして陽に照らされた海の向こうには、頭を垂らしているように背の低いリムノス島が見え、また聖山アトスの頂上が天に向かって伸びていた。私達は乾ききった黄金の新緑の上に散らされている石の上に座ったが、それらの石は島に地震が起きた時に、隣の山から飛んできたものだった。まさにその時、疲れ切ってしまったかのように、光は色を失い、影を長く引き伸ばし、諸物の上に値のつけられない程貴い秋の甘美のように垂れかかった。世界は熟している。彼らは私に海岸の方になじみの場所を示した。

――あそこは、マクリリエスと言うんじゃよ、司祭が言った、次に教師が言った。

――あそこでトルコ人達が破壊の限りを尽くしたのです。

――どの破壊のことを言っておいでですか。

――あの二十一年のことじゃよ。

私はこの島の老人達の思い出の中の、この島で起きた破壊に耳を傾けた。

商売のために帝都【コンスタンティノープル】に赴い

ていた二、三人の貴族達を、彼らはフィリキ・エテリア[九]の内に見つけた。島に戻る道中、彼らが知ったことを他の幾人かの貴族達にも教えてやった。二十年三月以来、サモトラキ島に係留していた船から、キリスト教徒達が至る所で立ちあがり、トルコ人達を打ちのめしていると耳にしていた。その時サモトラキ人達も年貢を納めることを拒否した。トルコ人達は彼らに、ロゴテティスという名前のイムヴロス人を一人送り付け、彼は島民達に優しく年貢を納めるように呼びかけたが、自分達の父親からそのことを聞いていた老人達が鮮明に覚えていたように、彼らは年貢ではなく、鉛と火薬のみを収めるようにする、と答えた。だがそれから、そのイムヴロス人が立ち去った時、彼らは自分達が言ったことの故に、トルコ人が虐殺に来るのではないかと恐れを抱き始めた。島にサミオス人が一人住んでいて、小銃と的でサモトラキ人達を訓練し始めた。当時島には他の武器もあったので、彼らは良いことも悪いこともやったのだろう。九月の初め、人々が言うには、マクリリエスに千人から二千人のトルコ人達がやってきた。サモトラキ人達はそれを知るや山に逃げ始めた。サミオス人は三、四十人の島民達と共にスタヴリと呼ばれる、ホラの西側の隘路にあるクコスとヴリホスの丘に登った。トルコ人達がホラへと進軍して来るのが見えたとき、島民達は彼らに発砲した。サミオス人の銃弾は彼らの旗手の下を掠めた。だが二発目を打とうとした時小銃が破裂してしまい、サミオス人は隣の人に引き金を引かせた。他のサモトラキ人達は彼のこの様を見て、次から次へと逃げ出し始めた。彼らは方々に散らばって、その内の何人かがホラの方へ走って行って、村人達にさっき起きたことを伝えた。そうして皆大いに慌てふためき逃げ出し始めた。しかし中には留まって家の中に隠れた者もいた。トルコ人達はホラに入り込み、すぐに二、三人と、賢くて十分の経験のあったキリアコス何某を捕らえて、彼に多くのことを命令して、彼をツァウシス[十]に任命した。彼は島民達に会いに行き、トルコ人達がきっと見逃してくれるから、降伏するようにと促した。そうしてゆっくりゆっくりとやって来て、七百人の男達が降伏したのだが、トルコ人達は、エフカスと呼ばれる場所にある岩の上に立つ要塞の下で、一人一人、子羊を殺すかのように皆虐殺してしまった。この屠殺場は三日間おかれていた。逃げ出せる者は逃げ出し、或る者は山に登り、或る者は洞穴に隠れ、或る者は海へと降りて行き、本土や島々に船を出した。至る所で人間

狩りをしながら、トルコ人達は家々に入って略奪した。ギリシア人を見つければその場で殺していった。教会の中に押し入り、聖徒達の目をつぶし、彼らが所持していた高価なものを奪って宝座[十二]を打ち怖し、槍を持っている者は聖書に次々と穴をあけた。曰く一か月間、島民全員を一掃し、その妻達を略奪するために彼らは山と洞穴で狩りを続けた。そしてこの野蛮な鬼ごっこの間ツァウシスとなったキリアコスが、自分の身の安全のためにいつも彼らの案内人を務めた。女達は小さい自分の子供を捨てざるを得ず、自分の身を守るため狂人のように赤ん坊を岩場から投げ捨てた者もれば、自分自身も崖から身を投げ死んでいった者もいた。生き残った女達を見つければ、トルコ人達は彼女らを奴隷にした。島民達は捕まった後如何なる抵抗もしなかった。そして多くのトルコ人を押しつぶすことのできる石が転がっている、高地にあって人の踏み込めないような場所でも、怖気づいてトルコ人に対して何もなすことはなく、寧ろトルコ人の手に生存者を引き渡し、彼らを即座に殺すことも女達と同じように彼らをも奴隷にすることをさえ黙認した。トルコ人達は帝都に多くの者を連れて行き、トルコ人の習慣と宗教に改宗させた。他の者達は飢えで死んだ。島に残った者達はわずかで、岩場や洞窟に身を隠し、トルコ人達に見つかることはなかった。殺せる限り殺し尽し、残りの者を奴隷にした後で、同胞を裏切ったのだからこの男が善人であるわけがないと言う声が上がり、彼らの案内役を十分に務めたツァウシスのキリアコスをも殺した。

それから七、八年間島はほぼ荒廃した状態のままで、時々海賊達がやって来て、さらに略奪を重ねたただけであった。

私はこの物言わぬなじみの場所を見ていた。物語は蘇ったかのように、私の目の前に絵画の形で現れていた。

それから、私は無性にどこかの島に身を隠してずっと一人きりになりたいと思うようになった。そして自分自身が島の王になって、その島を支配している様を妄想した。

太陽は西に沈み、私達はゆっくりとホラへと戻った。羊飼いが一人、咲き誇る花をハンカチに包んで私達を待っていた。彼は私達にそれを見せ、私達はその花を買った。

――夕飯はこれに蜂蜜をかけて食べるとしようか、と司祭が言った。

第四章：パリアポリ

人間も動物も文明も、その足跡を残すことなく過ぎ去っていくものだ。後の人々が自分達の時代に残されている作品の中でやっとその生を見出すことができるような、それ以外のものというのは今にも崩れ落ちそうな廃墟であり、打ち砕かれた彫像、ビリビリに引き裂かれた本といったところであろう。

全ての都市にパリアポリがあるわけではない。サモトラキ島のホラにはパリアポリがある。

そこで私は、大理石の神殿と建築物の廃墟、崩れ落ちた壁、粉々の石、彫られていたりいなかったりする大小の大理石、粉々になり形の歪んだ美しい偶像、河の激流で埋め立てられた港を見た。廃墟の至る所で、この廃墟を何とか覆い隠そうとしているように、野生のオリーヴ、ヒイラギ、草木が自生していた。そこで私は人間の歴史、つまり大洪水時代を生き延びるため彼らがこの島に来て定住したこと、そして彼らに宗教を示し、秘儀【τα μυστήρια】を現した神々の訪れを見た。それからペラスゴス人[十二]がやって来て通り過ぎ、次いでギリシア人がやって来た。

偉大な英雄達は皆この島を通り、秘儀に入るために留まった。イアソン、ディオスクロイ、ヘラクレス、オルフェアス、オディッセアス、アガメムノン。詩人達は、アルゴ船の船乗り達が大時化に見舞われた時、オルフェアスの助言に従って、この島に立ち寄るように命じ、それと同時に大時化が収まったと言っている。サモトラキ島の偉大な神々が嵐と暴風を治め、船乗り達を海嵐から救い出したのだ。その時、アルゴ船の船乗り達はこの島に向けて帆を張り、夜が来ると外に出て秘儀に向かった。そして再び海に向けて帆を張った時には、この旅路がうまくいくことを疑う者は誰もいなかった。この島にカドゥモスもやって来て儀式に、つまり秘儀に入った。そこで幸運にもゼウスの娘であるハルモニアを知り、妻として娶った。神々も喜びを露わにし、各々贈物を与えた。贈り物としてアポロンはキタラを、ムーサ達は笛を奏した。ある日ゼウスに怒りを抱いたポセイドンが海から上がり、島の頂上に上ってそこからトロイア人とアカイア人の戦いを見たのだが、彼の神的な重さによって島全体が震えた。

ゼウスの末裔であり、あの時パリアポリの住民だった

ペラスゴス人達が、のぼせ上がってあれやこれやと物語っていたので、後になってサモトラキ島に住むようになったギリシア人達もこれを知った。方々を見物していたヘロドトスもやって来て秘儀に入った。彼の歴史書の中で、彼はこれについて何か知っているかのように、皆には教えたくないのだと書いた。だがそこで秘儀に入っていた人々は、彼が何を言いたかったのかを理解している。しかし私達に少しも説明することなく、皆死んでしまった。

明らかなように、偉大な神々、サモトラキ島のカベイロス達は四人であり、その名はアクシエロス、アクシオケルサ、アクシオケルソス、そしてカスミロスである。ペラスゴス人達の理解したところでは、これらがどんな神々であるのか分からなかったが、ギリシア人達によって、デメテル、ペルセフォネ、ハデス、そしてヘルメスのように、また他のやり方では同族の別の神々として解釈され、表される。王の誰かがサモトラキ島に建てるために送ったスコパスの彫像は、アフロディテ、ファエトン、そしてポトスを表現している。リムノスにはカベイロスの神々や火の諸霊、そしてそれらの内の一つとしてヘファイストスがいた。おそらく偉大な神々の原初の形は、大地と天という最上の夫婦、初めの雌雄であり、彼らの神官ヘルメスであったのだろう。だが誰が事実を知り得ようか。しかしその基を掘り返し、偉大な神々の秘儀を曝しものにする権利が今の人間達にあるのだろうか。人々の無分別の話ではない。秘儀を受けた者が何を見、何をなそうが私達にはどうだってよい。だが私達は自分達が知っていることを言おう。見たところ、入儀と秘儀を受けた智者には二つの段階があるようだ。それは「秘儀を受けし者」【μύστω】と「秘儀を受けし敬虔者」【μύστω ευσεβείς】であり、彼らは印とお守りとして、オリーヴの冠と、大きな危険に直面した時に頭に巻き付ける紫の帯を身に着けていた。なぜなら偉大な神々が、秘儀を受けた者を、いや、彼らだけを溺死と餓死という途轍もない危険から救ってくれること、少なくともこのことだけは確実だからである。そして、もう一つ確実なのは、彼らが秘儀を知れば知るほど、今の自分自身よりもっと敬虔で正しく、そして美しくなるということである。授秘の儀式は一年のある時期にだけ行われたのではない。だが偉大で聖なる儀式の時期が厳しい夏の炎天下と重なるなら、それはより聖なるものとなった。文月【Αλωνάρη】の終わりから長月【Τρυγητή】の初めまで、毎年偉大な神々

の大祝祭が行われる。その時聖なる「行列」が礼拝のため、無数のギリシアのポリスからサモトラキ島に訪れる。もっと後になって、ローマも礼拝のために自身の行列を送った。サーオイと呼ばれる偉大な神々の神官達は、武具を身に着けてコリュバンテス[十三]のように笛と太鼓の音で神秘的な舞踏を舞った。秘儀の中で述べられた祝詞と名称はペラスギ語であり、ペラスゴス人が消えた後でもまだ島民達が島で話していたのだった。これらの神官達の中で、清めの儀式を行う一人がコエスと呼ばれ、秘儀に赴く者達を公に宣言していた。このコエスが、リュサンドロスに自分の大きな過失を告白するように要求した。――これを要求するのはお前か、それとも神々か、とそのスパルタ人が尋ねた。

――神々です。コエスは答えた。

――ならばお前は引き下がれ。彼らが私達に答え、私が彼らに真実を語るだろう。

そして、コエスが全く同じことを彼に問うた時、アンタルキダスはただ、「神々が知っている」とだけ答えた。

ペロポネソス戦争時カベイロス達の秘儀は、ヨーロッパとアジアの全ギリシアで、エレウシスの秘儀[十四]として有名だった。アリストファネスがそのことを報告している。スパルタ人達は秘儀を受けに通っていたのだった。そしてアテネ人達もカベイロスを尊敬し崇拝していたのでしばしば通っていた。ディアゴラスに対して彼らが行った非難において、サモトラキ島の秘儀に対する不敬と、秘儀を受けていない者の存在、そしてエレウシスの秘儀に対する不敬が即座に言及された。マケドニア人達の時代には、カベイロス達の名声はますます広まった。フィリッポスはサモトラキ島でオリュンピアスと出会い恋に落ちた。彼ら二人ともそこで秘儀に赴き、この彼らの出会いと愛から世界を治めた男、アレクサンドロスが生まれた。攻城者ディミトリオスは他のマケドニア人を皆打ち負かしたのだが、恐怖に駆られてマケドニアに向けて勝利のニキをパリアポリに置いた。リュシマコスがただ一人サモトラキ島の神官達の保護者になり、彼が管理した。アルシノエ・フィラデルフォスは、自分の息子達を惨殺したプトレマイオス・ケラヴノスから、命からがらサモトラキ島に逃げ込み、今尚その基(もとい)がパリアポリに残っている美しいロトンダを建て、偉大な神々に捧げた。マケドニアの最後の王で、恐ろしいローマ人にピュドナの戦いで敗れたペルセウスも、そこに隠れ家を求めた。プトレマイオス・フィロミトルも、アンティオコスに敗

れた後、財宝と共にそこに逃げ込んだ。この島は犯罪者以外の、逆境にある全ての人の隠れ家であった。ペルセウスの将軍アゲサンドロスは、ローマ人の手から逃れるため彼と共にサモトラキ島に逃げ込んだ。しかし秘儀のためにサモトラキ島にいたローマ人アッティリオスは、彼がデルフィのアポロンの祭壇の近くでエウメニスを殺したので、この男の存在が偉大な神々の祭壇を汚しかねないと告発した。そこでアゲサンドロスは、サモトラキ島に逃げ込んだ全ての殺人者を裁く、現地の聖なる法廷に召喚された。人を殺したことが明かされるのが怖かったので、エウメニスの件から何とか逃れようとしたが、ペルセウスが自分自身の共犯を白日の下に曝されないように彼を殺害するように命じた。しかしその時、彼も殺人の罪で告発され、最終的にローマ人達は彼を捕らえて、このマケドニア最後の王をローマに送って奴隷にし、公衆の面前で晒しものにした。

全ての人がサモトラキ島の聖所を尊敬している。アレクサンドロスからアウグストゥスに至るまで、人々はたった二回しかこれを犯そうとはしなかったのだが、その内の一回はミトリダテス戦争時の海賊である。彼らは聖所を荒らし、数千タラントもの価値のある装飾品を奪った。この時代サモトラキ島の巡礼が過去のどの時代よりも美しく飾り立てられていたのだ。

その時代を生きたカリマコス、ロードスのアポロニオス、パタラのムナセアスやその他の詩人と神話作家達は、サモトラキ島のカベイロスについて書いた。またカリストラトス、ポレモン、そしてイドメネウスといった他の者達も各々作品を書き、それぞれの言い伝えと島の歴史を全て物語った。

ローマ人達の時代が来て、カベイロスの神官達が政治的な目的を持って、忍耐強くローマの五神とサモトラキの神々が同じ神であり、アイネイアスがその神々をローマにもたらしたのだ、と言ったので、サモトラキ島は彼らにとっても民族【εθνικό】の聖地となった。偉大な神々の聖所に巡礼するローマ人の数は数え切れなくなった。正式なローマ人はエレウシスよりもサモトラキ島で秘儀を受けなければならなかった。マルケロスは豊かなシラクサ人の廃墟からもってきた豊かな贈物、絵画、彫像を捧げた。キケローも秘儀を受けたと言われている。ルクッルスのミトリダテス【六世】に対する遠征【第三次ミトリダテス戦争】の時に、ヴォコニウスは収穫の大儀式を見物し秘儀を学ぶためにゆっくりとサモトラキ島に向

かったので、ポントス王が逃げおおせてしまった程だった。紀元十八年、ゲルマニクスは秘儀を受けに行こうとしたが、不運と凶暴な風に妨げられ、島に足を踏み入れることができなかった。リバニオスは、この時代まだサモトラキ島の秘儀が定期的に行われていたことを報告している。

何世紀もの間、男、女、子供達が、偉大な神々の秘密を知り、その加護を受け、いつでもあらゆる破滅から身を守ろうとサモトラキ島に駆け付けた。

サモトラキ島にはカベイロス達の神託所や他の神々の聖所があった。この島にある無数の洞窟の内の一、ヘカテーに捧げられたゼリュティオスの洞では、夜が更けると密かに夜女神に狗々を捧げていた。島民達はデメテル港と呼ばれた港の近くでデメテルを、そしてヘルメス・サオス或いはソコスを、そして島の一番高い頂でゼウスを、そして彼らに秘儀を授けたこの島の住民と英雄達の祖先をも確かに礼拝した。

秘儀については、今日の島民は全く覚えておらず、全て綺麗さっぱり忘れてしまった。そして神々の像は炉に投げ込まれ、彼らの家の石灰にされてしまった。

一 Των Δραγούμης（一八七八―一九二〇）：外交官、政治家、ギリシアの民族主義的作家。父親は首相経験のあるステファノス・ドラグミス。バレスやニーチェの思想に影響を受ける。著作に『ギリシア文化』、『私のヘレニスムとギリシア』。

二 底本に Δραγούμης Των (1994b), *Σαμοθράκη, Το νησί*, Εκδόσεις ΒΑΣ.ΠΗΓΟΠΟΥΛΟΥ, Θεσσαλονίκη.を使用している。

三 η Χώρα：主邑。ギリシアの島々の中で一般的に主要な所を指す言葉であるが、サモトラキ島では同島の地名になっている。

四 サモトラキ島のサオス山（フェンガリ山）を指している。

五 同島北部の地名。

六 七十人訳聖書創世記第一章二十六節、κατ’ εἰκόνα ἡμετέραν καὶ καθ’ ὁμοίωσιν より。新共同訳聖書では、「我々にかたどり、我々に似せて」となっている。

七 いわゆる「サモトラケのニケ」を指しているだろう。一八八四年にルーブル美術館に展示されて以降、二〇一八年八月現在同地に置かれ続けている。

八 Λήμνος：サモトラキ島の南に位置する島。

九 η Φιλική Εταιρεία：ロシア帝国に在住するギリシア人が中心となって組織された、オスマン帝国からの独立運動を指導した秘密組織。

十 Τσαούσης：トルコ語では çavuş。使者の役割を持った兵士を

指す。

十一 *Αγία Τράπεζα*：至聖所に設けられる祭壇で、生体礼儀の中心をなす台座。

十二 *Πελασγοί*：ギリシアの古代先住民族を指している。

十三 *Κορύβαντες*：古代ギリシアにおいて、古代ギリシアの神々に武装した男性が舞う舞踏。

十四 *Τα ελευσινία μυστήρια*：古代ギリシアのエレウシスに起源を持つ、女神デメテルとペルセポネ崇拝のための儀式。